子どもたちのエンゲージメントを紡ぎ出す学びの創造
ーはじめにに代えてー

学校長　船越　勝

２０１６年度の『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』を刊行することになりました。この紀要も、今号で第４０集となり、一つの節目を迎えます。附属小学校の先輩教員たちが、子ども中心主義の教育実践を求めて続けてきた、いわば授業をめぐる真理・真実の探究の歴史がこの研究紀要の４０年の歴史に刻み込まれていると言えます。私たちは、また新しい１０年のなかで、今、求められる子ども理解と支援のあり方、子ども主体の学びと授業を求めて、教育実践の創造を通して、追究の歩みを進めていきたいと決意を新たにしています。

さて、今年度の附属小学校の研究テーマ（研究主題）は、「問い続け、学び続ける子どもたち」というメインのテーマを引き継ぎつつ、「子どもの言葉でつくる授業」という副題を新たに設定したものでした。そもそも「問い続け、学び続ける」という子どもの姿とは、なんでしょうか。それは、近年の教育心理学の研究成果を用いて表現するなら、学びに没頭する（エンゲージメント、engagement）姿と言ってよいでしょう。言い換えれば、「え、どうして！？」とか、「これは何でやろう？」とか、子どもたちがワクワク、ドキドキしながら、学びを追究していく姿だと言うことができます。では、こうしたエンゲージメントと言われる子どもたちの没頭には、昨年度から私たち附属小学校の研究と実践をご指導いただいている鹿毛雅治氏（慶應義塾大学）によると、先に述べたように、「一生懸命に取り組む」とか「熱中する」とかの行動的なエンゲージメントだけでなく、「興味を示している」とか「楽しんでいる」とかの感情的なエンゲージメントと、「目標実現のために努力する」とか「細部にまで几帳面で丁寧である」とかの認知的なエンゲージメントの３つの側面があるとされています。そして、そうした視点に着目しながら学びの実践をデザインしていくためには、以下のような実践課題の解明が要請されていることがわかってきました。まず第一に、子どもたちの認知的なエンゲージメントや感情的なエンゲージメントを引き出していくためには、まず何よりも「めちゃくちゃおもしろい！」とか「このことをもっと学びたい！！」とかと子どもたちが思わず没入してきたくなるように、より深い教科内容研究や教材研究が改めて求められているということです。次に、「〇〇さんの意見何で？おかしい」とか「何でこんな風に言えるんやろ」とかという認知的なエンゲージメントや感情的なエンゲージメントにつながる子どもの思いを紡ぎ出していくためには、一人ひとりの子どもの自らの実感に裏打ちされた言葉や表現に徹底してこだわり、他者の言葉や表現と比較・吟味していくことが大切です。また、そのことを通して、子どもたちが切実感を持った問いを深めていくことにもなっていくのです。これは、私たちが「子どもの言葉でつくる授業」にこだわった理由でもあります。最後に、こうした子どもたちの没等を生み出していくためには、行動的なエンゲージメントに関わる学びに向き合う姿勢や仲間と共々に問い合い、学び合う関係性や学級風土を創り出していくことが大切です。こうした研究上の気づきと発見を大切にしながら、次年度の研究と実践に取り組んでいきたいと考えています。

こうした研究と実践の生成過程としての意味合いも含んだ私たちが全力を挙げてまとめたこの紀要を是非ご一読いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。また、この紀要が私たち附属小学校と公立校の現場との「問い」を共有し、学び合いを深めるツールになっていければと希んでいます。

最後になりましたが、今年度も本校の様々な教育研究活動にご協力いただきました皆様に感謝するとともに、来年度も引き続き皆様とともに歩んでいきたいと願っております。

２０１７年３月